

GREEN ニュース

行動する
環境アドバイザーの会報

第58号

環境アドバイザー連絡協議会
代表 須永 徹
平成26年4月発行

雪から顔を出した座禅草
前橋市富士見町（旧富士見村）
沼の窪の市有林内の湿地にザゼンソウ群生地があります。
約3000株が自生し例年2月中旬から3月始めに開花しますが、今年は2月中旬の大雪で3月中旬以降が見頃でした。
水芭蕉と同じくサトイモ科に属し形が座禅を組む僧に見えることからこの名がつけました。
自ら発熱して雪を溶かして開花すると言われています。



群馬県環境アドバイザーの動き (平成26年4月20日現在)

前年度(第8期)の県環境アドバイザーは327名の登録をして頂いておりました。第9期(登録期間:平成24年4月1日～平成27年3月31日)への更新登録者は203名でした、今期の新規登録者を含め平成26年4月8日現在275名です。前期同様、各地で活躍されています



サポセンブログを携帯、スマートフォンで見よう。
左のQRコードを読み込んでね、スマートフォンの設定でグリーンニュースが見られます。

表紙画像 田中 和夫氏より

P2 環境政策課より

P3 須永代表より

P4 温暖化・エネルギー部会

P5 ごみ部会

P6 広報委員会、前橋地区会より

P7 安中地区より

P8 投稿(太陽光発電への思い)





環境アドバイザー研修会に行きました

(リサイクルプラザJ B・株式会社アドバン)

環境政策課 松村 賢一

今回は、1月28日の第2回環境アドバイザー研修会について、その様子をお知らせします。今回出かけたのは、リサイクルプラザJ Bと株式会社アドバンでした。いずれも埼玉県にある会社です。

リサイクルプラザJ Bは、皆さんも一度は目にしたことがある自動販売機を販売しているジャパンビバレッジが母体となっているリサイクル工場です。回収されたビン、缶、ペットボトルをそれぞれ分類し、ペレット化や圧縮したりして利用可能なものに再資源化していきます。清掃工場を見たことがある人は御存知かと思いますが、作業工程によっては、人の手を使って選別する必要があります。消費者が適正に捨てれば、この行程は省略していけるのかな…と思うと改めてゴミの適正な処理について私たち消費者が理解していかなければと感じました。

続いては株式会社アドバンに行きました。こちらは廃食用油をバイオディーゼル燃料化する工場です。工場では、燃料だけでなく粗製グリセリンやメタノールなどなるべく無駄を出さないように再生加工されており、担当者の方は、事業も軌道に乗ってきたとお話しされていました。

2つの施設を見てきて、「消費」し、ただ「捨てる」という事を私たちが見直すべきだと実感しました。捨てることに比べ、再生することは、はるかに多大なエネルギーを要することは明確です。今回も様々な方の御協力をいただき、研修会を持つことができましたことを感謝いたします。

－研修会後のアンケートより（紙面の都合上一部割愛しました）－

【研修で学んだこと】

- 環境に負荷をかけない循環型リサイクルの必要性を改めて実感してきました。(築比地庸雄さん)
- リサイクルを経営的に成立させている事例があったこと。廃棄物0に近い状態でリサイクルを成立させていたこと(両社とも)。(飯塚紘一さん)

【研修をどんな環境活動に役立てたいか】

- 地域での環境について話すことができましたら、力を込めて話せると思います。(百聞は一見にしかずを感じました。)(匿名希望)
- リサイクルに積極的に取り組んでいきたい。(小宮ふみ子さん)
- 各家庭から出るいわゆるごみの減量化と再資源化及びきれいな地域作りを環境アドバイザーとして具体化を提案したい。(宮崎亮二さん)





みんなのごみ減量フォーラムを終えて

群馬県環境アドバイザー連絡協議会
代表 須永 徹

ごみ部会が毎年イベントとして行って来た「ごみ減量事例発表会」と県が行って来ていた「環境フォーラム」が、初めて共催という形で3月18日に県庁のビジターセンターで多数の参加者を迎えて開催され、成功裡に終了しました。この事業を主体的に進め、細部にわたって調整を図ってくれたごみ部会及び県の担当の皆様、あらためて御礼申し上げます。

崎田裕子氏の講演は、実体験を踏まえた分かりやすい内容であり、ごみ減量について明日からでも出来ることも多く、全県民が実行すれば「あっと言う間に一人当たり排出量が全国で最少になれるなあ」と思えました。

事例発表は自治体・企業・民間の興味深い事例が発表され、これらについてもこれから各地域や団体ごとに取り組む事案としての参考例となるものでした。

さて、この共催という事例は県の環境部門とアドバイザーの関わり方や連携の仕方について、今後より一層の充実を図っていくための大きなエポックとなったと感じます。それはごみ部会だけでなく、温暖化・エネルギー部会や自然環境部会、そして環境アドバイザーの活動の拡充に向けても大きな示唆を与えてくれたものではないでしょうか。

ともすれば、最近の我々の活動自体が何か暗闇の中で堂々巡りをしているようなことに陥っていませんか。部会の活動に参加してくる方も同じ顔ぶれとなってしまう、うっかりすると単なる仲良しクラブ化していないでしょうか。

そこで年度も変わるこの時期に、我々が環境アドバイザー登録をした時の気持ちをもう一度思い出そうではありませんか。

自然環境や地球温暖化問題、エネルギー問題、ごみ問題など環境に関する問題の入口の幅は広く、それぞれの奥も深いものがあります。勿論、地域ごとに熱心な活動を行っているグループや個人の方がいらっしゃることも聴いていますが、群馬県環境アドバイザーとしては、まず県の環境施策に沿い、民間として補完できるところをサポートし、一緒になって群馬県を全国一の環境県にしていく先導隊としての環境アドバイザーでなければ、われわれの活動への評価も向上していかないばかりか存在理由もなくなっていくことになりかねないのではないのでしょうか。

部会ごとの活動をより活発化し、参加する人を増やしていくことはもとより、後継者としての若い世代を環境アドバイザーになってもらうための勧誘や登録しても活動歴のないアドバイザーに参加してもらう工夫などを今後の重要な課題として幹事会や役員会等で議論を進めていきたいと思えます。

今回のフォーラムの内容は、関係者が細かな打合せや調整を密に行ってくれたお陰で、とても充実した内容となり、予想を大きく越える参加者で会場が満員でしたが、フォーラムの成功に酔うことなく、この事例をきっかけとして環境アドバイザーの一人一人にも新たな動きが始まる事を期待したいと思います。

熱発電って何!?

発電するには、皆さんよく知っているように高温水蒸気の高圧でタービンを回して発電をします。その熱を得るための資源が何によるかの違いはあっても（LNG・石炭・石油・ウラン・木材など）最終的には水蒸気の利用をします。

それ以外は水力発電（これも水の力）、太陽光発電などが知られています。

そして3月の温暖化エネルギー部会に登場したのが・・・

「キャンドルラジオ」!

熱発電（ろうそくの炎だけ!）でラジオが付きます。

仕組みは・・・金属間の温度差によって生じる「電圧」を利用した発電で、「ゼーベック効果」と言うそうです。

温度差を直接電圧に変換するって! すごいですよね～!



部会の次回会合は

4月19日（土）10～12時

地球温暖化防止活動推進センター 様内

当部会では「メーリングリスト」「フレッシュミーティング」参加者を募集しています。詳しくはお尋ねください。
（温暖化エネルギー部会長 田口 勇夫）

「みんなのごみ減量フォーラム」経過報告

- 11月8日 ごみ部会（「ごみ削減事例発表会」の開催決定）
- 11月20日 県への協力要請（県から提案を受ける）
- 11月28日 緊急ごみ部会（代表参加、経過報告及び事例発表者決定等）
- 12月14日 準備会（講師決定等細部の検討）
- 1月15日 前橋市役所、NTT 東日本群馬に訪問し発表依頼
- 1月22日 準備会（県担当参加、ネーミング決定等）
- 2月26日 準備会（県担当参加、詳細決定等、最終会議）
- 3月11日 「フォーラム」参加申込み締切り
- 3月12日 連絡協議会役員会議、連絡協議会幹事会
- 3月15日 配布資料印刷他、受付リスト作成
- 3月18日 「みんなのごみ減量フォーラム」当日
- 4月15日 準備会（県担当参加、まとめ会議）



昨年4月以来、ごみ部会の中では群馬県のごみの現状（排出量ワースト2）を憂えて、今期も「ごみ削減事例発表会」を開催したいという声が出ていました。11月の部会で開催を決定し、20日に県環境政策課温暖化対策室に協力要請を行った際、廃棄物リサイクル課で毎年開催している「ぐんま循環型社会づくりフォーラム」とのジョイント開催を提案されました。ごみ排出量ワーストから脱却するためのアクションとして、ジョイント開催はとてもよい方法ではないか。また県との協働で開催できることは、単に資金面のメリットだけではなく、より幅広い県民・行政・事業者に連携をアピールできる機会と考えたのです。昨年の「廃食用油のリサイクル事例発表会」では定員50名でしたが、ジョイント開催で120名定員を目指すこととなりました。主催もごみ部会ではなく、連絡協議会と県との共催となりました。それに伴い連絡協議会準備会として準備を進めました。県の関係者の参加も得て20名くらいが集まり、「みんなのごみ減量フォーラム」という名称やキャッチフレーズ、役割分担などを決めました。この時点では本当に120名の座席が埋まるのかどうか、まったく自信ありませんでした。

3月4日現在で62名の参加申込みがあり、関係者など含めると70名を超えており、ようやく100名の大台が見えてきました。そして3月11日の締切日には149名の申込みとなりました。3月18日の当日欠席は24名、飛び入りがメディア関係者を含め10名で135名の参加となりました。座席が128席プラス補助椅子15席の計143席で何とか全員座れることになりました。当日は暖かく、暖房を切っても多少暑いくらいでした。特に大きな問題もなく、全体として熱気？に包まれた良い「フォーラム」だったと思います。参加者・関係者・スタッフなど全員の力で勝ち取った成果です。ありがとうございました。



なお、ごみ部会では新規参加者を募集しています。

ごみ部会の山田あてご連絡下さい itirouy.jp@yahoo.co.jp 090-4120-6508

(ごみ部会長 山田一朗)

<広報委員会から>

今春からいくつかのスーパーでレジ袋の有料化が始まりました。
また初の試みとして県と環境アドバイザー協議会との共同開催で「みんなのごみ減量フォーラム」も開催され、新たな息吹が感じられます。

今号では筆者の友人で太陽光発電事業を始めるという龍野氏に寄稿をお願いしました。

広報委員会ではグリーンニュースに載せる記事や写真「私の1枚」を募集しています。
問い合わせはメール rxk02772@nifty.com か 027-325-0721(電話・FAX)までお願いします。

(広報委員会 田中和夫)

環境アドバイザー前橋地区の報告

前橋地区の特徴は、会員数は多いのですが横の繋がりが無いのが長年の傾向でした。前代表 鈴木氏の呼びかけで地区会が始まり、2~3カ月に1回のペースで開催できればと考えておりましたが、私もまだ仕事を抱え地区自治会の役員を仰せつかりなかなか会を開くことが出来ませんでした(自治会の行事はほとんど土曜・日曜日です)。

又、会の開催にどれだけの会員の方が集まって頂けるか心配でしたが、実際第1回の会合には3名の出席で前途多難な船出でした。その後、回を重ねて行くうちに少人数の会合ではありましたが、各分野で活躍されている方が参加していただき、皆様の日頃の活動や今後の活動のお話を伺い大変参考になりました。

もともと前橋の会は規約もなく、ほとんど横の繋がりの無い人との意見交換をするのが趣旨でしたのでその後の会合にもいろいろな分野の方が出席していただき、自然エネルギーの問題、ゴミの問題、廃食油の活用、マイバスケ運動への参加、自然環境の保護等多方面にわたり貴重なお話しや問題点の指摘等出席者の皆様との討論を行い意義深い時間を過ごす事が出来ました。

廃食油の問題では、前橋市の環境部に油の回収について陳情に伺い色々意見交換を行い今後、色々な問題がありクリアしなければならぬ事が多々あるが前向きに考えて貰える事になりました。

26年度はまだ予定は決まっていますが、会員皆様の都合をその都度お聞きする事はできませんので基本的には年3~4回土曜日の午前中(10:00~12:00)前橋市の中央公民館元気21の会場で会合を持ちたいと考えております。会の1ヶ月前には会員皆様に案内状を発送したいと考えています、皆様が日頃の活動について発表していただければ他の会員の方々の参考になると思いますので積極的に参加して下さい願います。

私事ですがまだ仕事を抱えており、今年も自治会の役員にきまりなかなか思うような活動が出来ないと思っておりますが、自分なりの生活の中で環境問題に取り組んでまいりたいと考えておりますので本年度もよろしく願います。

(前橋地区会長 宗 義彦)

地球が好きですか？

空は青いのに大粒の雨と強風！最近の異常気象に不安を覚えている人はとても多いと思う。IPCCの作業部会が3月25日から横浜で開かれた。それによるとおおむね、大気中の温室効果ガス濃度は化石燃料の使用増などを背景に上昇し続け、現在約400ppmに達している。報告書案は、今世紀末の濃度を430～480ppmに止めれば気温上昇を2度未満に抑制できる可能性が高いと指摘している。そして、目標達成には温室効果ガス排出量を40～70%程度削減する必要があると試算している。それには低炭素エネルギーを現在の17%から50年には40～70%程度に増やす必要があるとしている。

翻って、日本でも昨年の記録的猛暑や集中豪雨他2月の百年に一度といわれた大雪など……。これからは、このような事が恒常的に起きる可能性が大なのである。特に自然相手の農業は素人には想像できないほど本当に大変なことと思う。

それらの災害被害を少しでも減らすためには、私たち一人ひとりが地球の構成員であること、全ての生産者も消費者も地球家族であることなどを認識し、官民あげて今まで以上に、節電・省エネ、代替エネルギーの使用加速などの勉強会や広報活動、また聖域なき議論も強力に推し進めるべきと強く強く思う。

「一は万が母」といわれる。私が温暖化防止の主体者！との強い思いになった時、必ず「吹く風、枝を鳴らさず、雨、土くれを砕かず！」の義農^{ぎのう}の世^よも夢ではないと思う。いや、人間の連帯責任としてそうしなければいけないと考えつつ、きょうもエコに頑張っている。

(安中地区 磯貝 享子)



「私の太陽光発電への想い」

太陽光発電は自然の光を電気に変換する太陽光パネル、発電した直流電流を交流電流に変換するパワーコンディショナ、電気を集めて電力会社へ送電する集電器の3つの構成でなります。物理的には光から電気へのエネルギー形態の変換ですが、社会的には自然光を社会生活に有用な電力への変換で「自然と社会の連系」とも言えます。自然の性質を映し、日の出とともに働き、光の強さに比例して発電し、日の入りとともに休息に入ります。陽の光は季節によって高くなったり（夏至）低くなったり（冬至）で、また天候次第で発電量が大きく変化し、社会の需要変動に応じない不安定な電源と言えます。これはベース電源に適しています。

将来のエネルギー社会は環境と経済性の両立が必要です。再生可能エネルギーの特長を活かし、しかも低コストの電力供給がなされなければなりません。米国のGEのトップ（イメルト CEO）が、「天然ガス火力 + 再生可能エネルギー」のベストミックス論を唱えています。天然ガス火力は米国では最も安いコスト電源と評価されています。また環境面では他の化石燃料（石油、石炭）に比べよりCO2の排出量が少なく、さらに再生可能エネルギーの不安定性に対し最も出力調整がしやすいという特長があります。それ故私はこの考えに大賛成です。

太陽光発電事業には立地条件のあった土地が必要です。出力規模に応じた土地面積（出力50KWに対し200坪くらい）、日当たり良好で障害物がないこと、送電するための電柱が近くにあることなどです。どこでも良いということにはなりません。また天候に恵まれた地域が良いことは当然です。群馬県は全国的に見て年間平均日射量が大きく太陽光発電に適した地域です。



2013年夏私は起業を決断しました。ゴルフ仲間の友人の勧めがきっかけです。たまたま県内の吉岡町に400坪の土地を求め、100KW（太陽光パネル384枚）の発電設備を計画しました。考えて見ればこの事業は多くのリスクがあります。1600年前に榛名山は大爆発をしました。私の土地にもその痕跡があります。少し掘ると火山灰層が出、大きい石がゴロゴロしています。またいつ火山が爆発するか誰も分かりません。台風、竜巻、大雨、雷、地震など自然災害が考えられ

ます。リスクに対する認識が必要です。発電施設の日常的管理も重要です。発電量のチェックのほか安全と環境にも配慮しなければなりません。施設内に子供が入って負傷する事故が起こらないよう安全対策をしなければなりません。また雑草についても近隣に対し配慮が必要です。

最後に、私の老後の生きがいとして、農産物と同様の「自然と社会の連系」であり、また未来のエネルギー社会でベース電源であるこの太陽光発電施設を散歩しながらずっと見守りたい。

（龍野哲雄）